

# 臨地実習に関った看護師の学びに影響する要因の検討

高橋方子、竹本由香里、丸山良子<sup>1)</sup>

宮城大学看護学部

キーワード：臨地実習、看護師、学び

## 要 旨

本研究は看護師が臨地実習に関ったことで得た学びに影響する要因を明らかにすることを目的とし、基礎看護学実習に関った看護師171名を対象に質問紙による調査を行った。学びに影響する要因をより明確にするために、看護師の学びに関する7項目の合計得点の最小値から平均値-1/2SDの範囲にあるものを学びの少なかった群（L群）、平均値+1/2SDから最大値の範囲にあるものを学びの多かった群（H群）とし、2群について比較検討を行った。その結果以下のことが明らかになった。

- 1) 実習への関りの実態と学びとの関連は、H群とL群では実習目的や実習方法の把握状況に有意差が見られ、H群の方が実習目的及び方法の把握率が高かった。
- 2) 実習指導に関った立場はH群ではL群より指導者の割合が高かった。
- 3) カンファレンスへの参加の有無ではH群とL群には有意差が見られ、H群にカンファレンスに参加したものが多かった。
- 4) 学生に対して実習しやすい環境を整える態度や学生に対する評価に関してH群とL群では有意な差があり、看護師自身の学びについても看護師の学生に関する姿勢や学生との関係性が関連していると考えられた。
- 5) 負担感と学びとの関連ではH群の方が「自信をなくす」「気遣いが大変」の2項目について負担感が強く、L群は業務が増えることに関する負担感が強く、負担に感じる内容に差が見られた。

## The Effects of Learning for Nurses Who Accept Nursing Students in Clinical Practica

Masako Takahashi, Yukari Takemoto, Ryoko Maruyama<sup>1)</sup>

Miyagi University School of Nursing

Key Words : clinical practica, nurse, learning

## Abstract

The purpose of this investigation was to clarify the effects of learning for nurses who accepted nursing students in clinical practica. A survey of 171 nurses who instruct nursing students was conducted by questionnaire.

A learning index score for each nurse was calculated by summing the results for the seven items on the questionnaire related to learning. To further clarify the effects on learning, nurses were classified into two groups. Nurses with a score between the minimum score and the average - 1/2 SD were placed in group L. Nurses with scores between the average + 1/2 to the maximum score were placed in group H, which was assumed to have learned substantially more than group L. From a comparison of the two groups, the following conclusions drawn from the remaining data on the questionnaire:

- 1) There was a significant difference between group H and group L in terms of understanding the purpose and methods for the clinical practica. The level of understanding the purpose and method in group H was higher than in group L.
- 2) There were more clinical instructor nurses in group H than group L.
- 3) A significant difference was observed in conference attendance, with most of the nurses who had attended conferences in group H.
- 4) A significant difference was observed in attitudes toward the preparation of appropriate environments in which the nursing students would learn and the evaluation of the nursing students. It was noted that the nurses' attitudes toward their own learning was affected by the relationship between the nurses and the nursing students.
- 5) A difference between group H and group L was observed in the perceived burden imposed by the clinical practica. Group H felt a more severe burden (lose confidence, serious anxiety) than group L which experienced the burden in terms of increased work loads due to instructing the nursing students.

1) 広島国際大学保健医療学部看護学科

(Department of Nursing Faculty of Health Science Hiroshima International University)

## I. はじめに

臨地実習で学生に関する看護師の役割は大きく<sup>1)2)</sup>、当大学の基礎看護学実習においては、学生が看護師の様々な看護場面を見学することから始まり、学生の受持ち患者の決定後は、その患者を担当する看護師とともに看護の展開を行うというように看護師と学生は深い関りを持っている。その関りの中で学生と看護師の間では様々なやりとりが存在すると考えられる。思考や探求はいつも人と人との相互のやりとりや働きあいによって織り成される対人関係状況の中で発生し展開されるものであり<sup>3)</sup>、臨地実習は学生だけではなくその状況に関与する看護師もその相互関係の中から成長していくことができる機会になると考えられる。また、藤岡は臨床の場における一つ一つの行為はそれが一定の制度に組み込まれた一断面であるという意味において、常に「業務」という性格を持ち、それは絶えず決まりきった行動パターンの機械的な繰り返しに陥る危険性にさらされていると述べている<sup>4)</sup>。学生に関することはややもすると業務というパターンになりがちな日常の中にありながら、自分自身の看護を振り返る機会になり得ることにおいても看護師にとって有益ではないかと思われる。これまで実習に関した看護師の実習に対する意識に関しては、指導上の問題や指導に対する達成感<sup>5)~8)</sup>、指導者の実習に対する関心と影響する要因<sup>9)~13)</sup>について検討がなされているが、これらの検討は学生のために行われたものがほとんどである。その中で学生に関した看護師も学びを得ていると述べるものはあるが<sup>5)10)14)15)</sup>看護師自身の学びに関する詳細な検討は少ない<sup>16)</sup>。前報では、基礎看護学実習に関した看護師の学びと負担感の内容について報告したが<sup>17)</sup>、本報では基礎看護学実習に関した看護師の学びに影響する要因の検討結果について報告する。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象及び調査方法

当大学の基礎看護学実習 I 段階（以下実習）を受け入れた病棟の看護師353名に対して質問紙による配表調査を行った。研究内容、データの分析方法、回答が強制ではないことを質問紙に明記し、

また質問紙は無記名で封筒に入れて回収し匿名性を保証した。調査期間は基礎看護学実習（2001. 2. 27～3. 2）終了後から1週間であった。322名から回答があり（回収率91.2%）その内、学生に直接関わったと回答したものの171名（53.1%）のデータを分析の対象とした。

### 2. 用語の操作的定義

ここでいう「学び」とは看護師自身が自覚した経験的作用に基づく興味、関心、態度、好悪、価値観等にわたる個人的諸傾向、及び知識技能などの諸能力の変容、または変容への契機と定義した<sup>18)19)20)</sup>。

### 3. 質問紙について

本研究で使用した質問紙は「対象者の属性」「実習に関したことによる看護師の学び」「実習への関りの実態」「看護師自身の学生への関り方」「実習に関することでの負担」「学生に対する看護師の評価」から構成されている。「実習に関したことによる看護師の学び」に関しては2000年10月に実習指導者講習会を受講し臨床実習指導経験のある看護師35名に行った「臨床実習指導に関することでの学びと好ましくない影響についての調査結果」をもとに7つの質問項目を作成した。また、学びに関連する要因と考えた「実習への関りの実態」「看護師自身の学生への関り方」「実習に関することでの負担」「学生に対する看護師の評価」に関する質問項目は、上述の調査結果、基礎実習に関した看護師2名への半構成面接内容、ETCB（Effective Teaching Clinical Behavior）<sup>21)22)23)</sup>を参考に作成した。「実習に関したことによる看護師の学び」「看護師自身の学生への関り方」「実習に関することでの負担」「学生に対する看護師の評価」に関する質問は「そう思う」「まあまあ思う」「あまり思わない」「全然そう思わない」の4段階評定で回答を求めた。

### 4. 分析方法

各質問項目に対する回答を、肯定的に考えているほど得点が高くなるよう否定的な質問項目の得点を逆転させ、4～1点まで得点化し平均値と標準偏差を求めた。実習に関したことによる学び（以下「学び」）の多さについて測定するために、学びに関する7つの質問項目の得点を合計した。

次に学びに影響する因子をより明確にするために、平均点から $\pm 0.5SD$ の範囲にある67名を除き、最低点から平均点 $-0.5SD$  (7.0~16.1点)までを学びの少なかった群 (以下L群)、平均点 $+0.5SD$ から最高点 (20.1~28.0点)までを学びの多かった群 (以下H群)とし、H群49名、L群48名で比較検討を行った。各質問項目についてH群とL群とでt検定を行い、看護師の実習に関することでの学びと「看護師自身の学生への関り方」「実習に関することでの負担」「学生に対する看護師の評価」について検討を行った。またLeveneの検定を行い等分散性が得られなかった項目についてはWelch法で検定を行った。学びと「対象者の属性」「実習への関りの実態」に関してはクロス表を作成し $\chi^2$ 検定またはFisherの直接法により検討を行った。分析にはSPSS10.0を使用した。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 実習指導に関することでの学びについて

学びに関する7項目の合計は最大値が28.0点、最小値が7.0点で、平均点は、18.2 (SD=4.2)であった。合計値と項目得点の相関を調べたところ全ての組み合わせにおいて高い相関を示した。 $(r=.660\sim.808, p<.01)$  また、7項目全体の信頼性係数 (Cronbach's  $\alpha$ ) は.86であった。

7項目の中で最も平均値が高かったのは「日頃行っている自分の看護を振り返る機会になった」2.92 (SD=.89)であった。次いで「初心を思い出す機会になった」2.78 (SD=.83)、「実習指導に関することは勉強するきっかけになった」2.63 (SD=.78)で、学生を通して自己を振り返る項

目得点がやや高い傾向にあった。その他の項目については表1に示す通りであった。

H群では学びに関する7項目の合計値の平均は22.9 (SD=2.02)、L群は13.2 (SD=2.4)であった。H群で最も高かった項目は「日頃行っている自分の看護を振り返る機会になった」3.55 (SD=.54)、次いで「初心を思い出す機会になった」3.45 (SD=.67)であった。L群では「初心を思い出す機会になった」2.13 (SD=.64)が最も高く、次いで「日頃行っている自分の看護を振り返る機会になった」2.06 (SD=.78)であった。H群もL群も全体と同様に学生から新しい事を得ることに関する項目よりも自己を振り返る項目得点が高い傾向にあった。

#### 2. H群とL群の比較について

##### (1) 属性と学びとの関連

性別は全対象者では3.5% (6名)が男性で、H群には2.0% (1名)、L群6.3% (3名)だった。平均年齢は全対象者で $30.1\pm 8.7$ 歳、H群 $30.1\pm 8.6$ 歳、L群 $31.3\pm 7.8$ 歳であった。また、平均臨床経験年数は全対象者では $9.6\pm 8.4$ 年、H群 $8.6\pm 8.2$ 年、L群 $10.0\pm 8.4$ 年であった。職位は全対象者では管理職が9.0% (15名)で、H群に14.3% (7名)、L群は4.3% (2名)、教育課程では看護短大卒または大学卒のものは全対象者で14.8% (24名)、H群20.4% (10名)、L群4.3% (2名)であった。(表2)

学びと対象者の属性との関連の検討の結果、H群とL群では年齢、性別、臨床経験年数、職位、指導者講習会受講の有無に関して有意差は見られなかった。しかし教育課程に関して有意

表1 看護師の学び

	M $\pm$ SD 全体	M $\pm$ SD L群	M $\pm$ SD H群
日頃行っている自分の看護を振り返る機会になったか	2.92 $\pm$ 0.89	2.06 $\pm$ 0.78	3.55 $\pm$ 0.54
学生の発想が新鮮に感じられる機会があったか	2.43 $\pm$ 0.86	1.75 $\pm$ 0.64	3.16 $\pm$ 0.69
最近の教育内容について知る機会になったか	2.44 $\pm$ 0.74	1.85 $\pm$ 0.55	3.10 $\pm$ 0.59
学生を通して若い世代を知る機会になったか	2.43 $\pm$ 0.79	1.77 $\pm$ 0.56	3.16 $\pm$ 0.59
実習指導に関することは勉強するきっかけになったか	2.63 $\pm$ 0.78	1.88 $\pm$ 0.53	3.29 $\pm$ 0.54
実習指導に関することで仕事上の意欲を高める機会になったか	2.57 $\pm$ 0.8	1.77 $\pm$ 0.59	3.22 $\pm$ 0.55
初心を思い出す機会になったか	2.78 $\pm$ 0.83	2.13 $\pm$ 0.64	3.45 $\pm$ 0.65
合計	18.2 $\pm$ 4.2	13.2 $\pm$ 2.4	22.9 $\pm$ 2.02

差が見られ ( $p<.05$ )、H群に短大卒または大学卒と回答したものの割合が高かった。(表3)

表2 対象者全体及びグループ別対象者の背景

		全体	L群	H群
性別	男性	6(3.5)	3(6.3)	1(2.0)
	女性	164(96.5)	45(93.8)	48(98.0)
年齢	21~29歳	100(62.9)	23(52.3)	29(61.7)
	30~39歳	31(19.5)	12(27.3)	11(23.4)
	40~49歳	22(13.8)	8(18.2)	6(12.8)
	50~59歳	6(3.8)	1(2.3)	1(2.1)
	60歳以上	126(75.9)	30(65.2)	38(79.2)
経験年数	3年未満	40(24.1)	16(38.4)	10(20.8)
	3~5年	52(32.3)	9(20.5)	15(31.3)
	6~10年	33(20.5)	11(25.0)	9(18.8)
	11~20年	28(17.4)	7(15.9)	10(20.8)
	21年以上	30(18.6)	12(27.3)	9(18.8)
		18(11.2)	5(11.4)	5(11.4)
職位	スタッフ	152(91.0)	45(95.7)	42(85.7)
	管理職	15(9.0)	2(4.3)	7(14.3)
教育課程	看護専門課程2,3年	138(85.2)	44(95.7)	39(79.6)
	看護短大・大学	24(14.8)	2(4.3)	10(20.4)
指導者講習会受講の有無	あり	36(21.2)	7(14.6)	11(22.4)
	なし	134(78.8)	41(85.4)	38(77.6)

( ) 内は%

表3 教育課程の比較

	専門学校	短大又は大学	合計
L群	44(95.7)	2(4.3)	48(100.0)
H群	39(79.6)	10(20.4)	49(100.0)

Fisherの直接法  $P<0.05$

## (2) 実習への関りの実態と学びとの関連

「実習への関りの実態」では実習目的、実習方法の把握、実習に関した立場、学生と関った日数・人数、学生の記録物を読む機会、カンファレンスへの参加について調査を行った。

対象者全体では、実習目的の把握率74.4% (126名)、実習方法の把握率79.3% (128名) であった。また実習指導者として関ったものの割合は12.7% (21名) だった。H群とL群の比較では実習目的、実習方法の把握状況に差があり ( $p<.01$ )、H群は実習目的の把握率97.7%、L群では65.8%、実習方法の把握率はH群は100.0%、L群では77.8%とH群の方が実習目的及び方法の把握率が高かった。(表4、表5) また実習指導に関した立場ではH群はL群より指導者の割合が高く ( $p<.05$ )、H群22.9%、L群では4.2%であった。(表6)

表4 実習目的の把握状況の比較

	知っている	知らない	合計
L群	25 (65.8)	13 (34.2)	38(100.0)
H群	42 (97.7)	1 (2.3)	43(100.0)

Fisherの直接法  $P<0.01$

表5 実習方法の把握状況の比較

	知っている	知らない	合計
L群	28 (77.8)	8 (22.2)	36 (100.0)
H群	41 (100.0)	0 (0)	41 (100.0)

Fisherの直接法  $P<0.01$

表6 実習指導に関わった立場の比較

	指導者	指導者以外	合計
L群	2(4.2)	46(95.8)	48(100.0)
H群	11(22.9)	37(77.1)	48(100.0)

Fisherの直接法  $P<0.05$

学生と関った平均日数は対象者全体では1.7 $\pm$ 0.9日、関った学生数の平均は2.8 $\pm$ 3.2人だった。H群では1.96 $\pm$ 1.13日、3.46 $\pm$ 4.68人、L群では1.57 $\pm$ 0.8日、2.20 $\pm$ 1.28人で有意差は見られなかった。学生の記録物に関しては全対象者の90.6% (155名) が「読む機会がなかった」と回答していたが、H群81.6%、L群89.6%と両群とも多くのものが学生の記録物は読んでいなかった。カンファレンスへの参加する機会があったものは対象者全体の15.4% (27名) で、平均参加回数は0.3 $\pm$ 0.8回とカンファレンスに参加したものは少なかった。H群はカンファレンスに参加したものは30.6% (15名) で平均参加回数は0.65 $\pm$ 1.26回、L群では6.3% (3名)、0.06 $\pm$ 0.25回で、カンファレンスに参加した人数は全体として少ないにも関わらず有意差が見られた ( $p<.01$ )。(表7)

表7 カンファレンスへの参加状況の比較

	あった	なかった	合計
L群	3(6.3)	45(93.8)	48(100.0)
H群	15(30.6)	34(69.4)	49(100.0)

Fisherの直接法  $P<0.01$

## (3) 看護師自身の学生への関わり方と学びとの関連

対象者全体では「気軽に質問をできる雰囲気を作っていたか」は2.82 (SD=.69)「理解ある関わりを行っていたか」2.72 (SD=.61)、「学生が新しい体験ができるように配慮していたか」2.72 (SD=.63)と平均点はやや高い傾向にあった。「学生とよい人間関係がとれていたか」2.59 (SD=.57)、「学生にかかわることが好きか」2.45 (SD=.69)、「学生に対して看護師としてよいモデルになっていたか」は2.14 (SD=.58)であった。

H群とL群との比較では「学生に関ることが好きか」「気軽に質問をできる雰囲気を作っていたか」「学生が新しい体験ができるように配慮していたか」についてはいずれもH群の方が平均値が高く有意な差が見られた ( $p<.01$ )。しかし、「学生に対して看護師としてよいモデルになっていたか」については、H群もL群も否定的な回答をしたものが多く、有意差は見られなかった。(表8)

## (4) 学生の実習態度に対する看護師の評価と学びとの関連

全対象者では各項目の平均値は「学生の実習態度は熱心だったか」2.97 (SD=.69)、「患者さんに熱心に関っていたか」2.92 (SD=.74)、「学生がきちんと報告を行っていたか」2.81 (SD=.78)、「担当の看護師に学生が自分の行動計画をきちんと伝えていたか」2.54 (SD=.84)、「学生が看護職師に積極的に質問を行っていたか」2.32 (SD=.80)だった。学生の実習態度や患者に対する態度に関する評価に比べて、看護師に学生自身から主体的に関る必要のある質問や行動計画の報告に関する評価は低い傾向にあり、H群、L群の平均値も対象者全体と同様の傾向を示した。

また、H群とL群では「学生の実習態度は熱心だったか」「患者さんに熱心に関っていたか」「担当の看護師に学生が自分の行動計画をきちんと伝えていたか」「学生が看護師に積極的に質問を行っていたか」「学生がきちんと報告を行っていたか」のすべての項目において有意差が見られ ( $p<.01$ )、いずれもH群の方が平均

値は高かった。(表9)

## (5) 負担感と学びとの関連

全対象者の負担感に関する項目の平均値は「学生が見学することを不安に感じたか」2.73 (SD=.73)、「自信をなくすことがあったか」3.18 (SD=.62)、「他のスタッフへの気遣いがたいへんであったか」2.67 (SD=0.77)、「業務に支障をきたすことがあったか」2.42 (SD=0.73)、「業務が増えたと感じたか」2.39 (SD=.76)だった。全体としてはやや業務に関しての負担の方が強い傾向にあった。

H群とL群との比較では「業務が増えたと感じたか」「学生に関る事で自信をなくすことがあったか」「他のスタッフへの気遣いが大変だったか」について有意差が見られた ( $p<.01$ 、もしくは.05)。「自信をなくすことがあったか」では全体としての平均値が高いにも関わらず有意差が見られた。平均値はH群の方が低い値を示し自信をなくしたと感ずるものが多い傾向があることがわかった。また、「他のスタッフへの気遣いがたいへんであったか」についても有意差が見られたが、いずれもH群のほうが平均点が低く、不安や気遣いなどをL群より強く感じていることが明らかになった。一方で「業務が増えたと感じたか」に関しても有意差が見られたが ( $p<.01$ )、平均点はH群の方が高く、業務が増えたと感じたのはL群の方である事がわかった。(表10)

## IV. 考 察

実習への関りの程度と学びとの関連では、学生と接する時間が長いほど、学生から学びを得る機会も多くなると考えたが、H群とL群では関った学生の人数や日数に有意な差はなく、実習目的や実習方法の把握状況に有意差が見られた。中西は臨床実習指導者の関りは場面での関りであると述べているが<sup>24)</sup>、看護師がただ関るだけではなく実習目的や方法を把握して関ることが看護師自身の学びに影響するとすることが示唆された。前報で報告した中では、実習目的や実習方法の把握手段は、大学側が行う実習説明会に参加するものは学生を受け入れる病棟師長や実習指導者が主である

表 8 看護師自身の学生への関り方に対するH群とL群の比較

	L 群	H 群	t 値	自由度	検定結果
	M (SD)	M (SD)			
学生と関することは自分は好きだと思うか	2.15 (0.71)	2.75 (0.73)	-4.1	94	**
学生が気軽に質問できる雰囲気を作っていたか	2.75 (0.57)	3.10 (0.68)	-2.76	95	**
学生に対して理解あるかかわりをおこなっていたか	2.69 (0.47)	2.90 (0.62)	-1.882	95	
学生が新しい体験ができるような機会を作っていたか	2.60 (0.68)	2.90 (0.62)	-2.23	95	**
学生とよい人間関係がとれていたか	2.44 (0.58)	2.80 (0.54)	-3.15	94.177	** (★)
学生に対し看護師としてのよいモデルになったと思うか	2.09 (0.58)	2.25 (0.64)	-1.316	93	

\*\*p<0.01 \*p<0.05

(★)はWelch法

表 9 学生に対する看護師の評価に関するH群とL群の比較

	L 群	H 群	t 値	自由度	検定結果
	M (SD)	M (SD)			
学生の実習態度は熱心だったと思うか	2.65 (0.73)	3.27 (0.57)	-4.658	88.864	** (★)
学生は患者さんに対して熱心にかかわったか	2.54 (0.77)	3.17 (0.63)	-4.349	90.434	** (★)
学生は担当の看護師に自分の行動計画をきちんと伝えたか	2.23 (0.81)	2.82 (0.78)	-3.643	95	**
学生は看護師に積極的に質問を行っていたか	1.96 (0.54)	2.76 (0.83)	-5.603	83.041	** (★)
学生は担当の看護師にきちんと報告を行っていた	2.50 (0.77)	3.08 (0.73)	-3.81	95	**

\*\*p<0.01 \*p<0.05

(★)はWelch法

表10 実習指導に関ることによる負担感に対するH群とL群の比較

	L 群	H 群	t 値	自由度	検定結果
	M (SD)	M (SD)			
学生が見学することが不安に感じることがあったか	2.85 (0.78)	2.63 (0.76)	1.43	93	
学生と関することで業務に支障をきたすことがあったか	2.33 (0.86)	2.51 (0.62)	-1.163	85.176	(★)
学生に関することで業務が増えたか	2.17 (0.88)	2.63 (0.67)	-2.935	95	**
学生に関することで自信をなくしたと感じたことがあったか	3.46 (0.65)	3.00 (0.68)	3.362	94	**
他のスタッフへの気遣いが大変だと感じたか	2.92 (0.77)	2.59 (0.81)	2.021	95	*

\*\*p<0.01 \*p<0.05

(★)はWelch法

が、その出席者から説明を受けたものが最も多かった。それ以外にも20%以上のものが自分自身で実習要項を読み把握していた<sup>17)</sup>。この状況から、情報を得る手段は異なっても実習目的や方法を把握する事は、実習に対する看護師の関心を高め、看護師が学び得るための要因になるのではないかと考えられた。

実習指導に対する関心に関しては臨床経験年数や年代との関連が報告されているが<sup>11)12)25)</sup>、学びに関してはそれらとの関連はみられなかった。性別、年齢、子供の有無、職位では両群との間に有意差はなく、教育課程についてのみ有意差が見られ、H群に短大卒または大学卒のものが多かった。大学の実習ということに関した看護師自身との教

育背景の類似から関心が高くなったのではないかと推測されたが、これに関して明らかにすることは今後の検討課題であると考えられた。また実習に関した立場では臨床実習指導者とスタッフとの間では実習指導に対する認識の違いが報告されているが<sup>6)</sup>、本調査においてもH群の方が実習指導者として関したものの割合が高い傾向にあった。実習指導者は実習に対する責任が他のスタッフよりも大きく存在することになるのではないかと考えられる。早坂は相互成長のためには責任と関心の重要性をあげ、さらに責任と関心は共感能力の基礎を支えるものであると述べている<sup>26)</sup>。共感能力により相手の状況に自分の身をおき問題を他者の立場から眺めることができるのである。実習に

関ることにより学びを得るためには、実習に向けられる関心と責任が影響すると考えられた。

実習記録を読む機会やカンファレンスへの参加の機会は全体として少なかったが、その中でもカンファレンスに参加する機会はH群の方が多かった。小野はカンファレンスの機能として相手の発言を通じて自分自身の考えが明確になることをあげているが<sup>27)</sup>、カンファレンスでの学生の発言を通じ、看護師は自分自身の看護について振り返りを行う、あるいは学生の状況を把握することができると思われた。学生に関るだけではなく、学生の考えが把握できること、また看護師自身が振り返る機会を持つことも、看護師の学びには大きな影響を与える要因であると考えられた。H群では「気軽に質問できる雰囲気を作っていたか」「新しい体験をできるように配慮していたか」等、学生に対して実習しやすい環境を整える態度に関する項目の平均値が高かった。また、実習態度や、看護師への報告や行動計画の伝え方、質問についての学生に対する評価も高かった。実習では関った看護師との関係性が学生の学びに影響すると報告されているが<sup>28)</sup>、看護師自身の学びについても看護師の学生への関る姿勢や学生との関係性が関連していると考えられた。

負担感と学びとの関連ではH群の方が「自信をなくす」「気遣いが大変」の2項目について負担感が強かった。またL群は業務が増えることに関する負担感が強く、負担に感じる内容に差が見られた。負担は義務に対する責任と定義されるが<sup>29)</sup>、実習に関心を持ち学生と向かい合うほど、情緒的な負担が大きくなることが明らかになった。

## V. 結 論

看護師が実習で学生と関ることによる学びは、性別、経験年数や職位等の属性、学生と関った日数や人数よりも、実習に向けられる関心と実習に対する責任及び学生との関係性が影響すると考えられた。看護師にとっても学びが得られるような実習にするためには、実習に対する関心を高める方法や学生の考えをいかに把握するかについて検討される必要があると考えられた。また、学生の様子を知り看護師の学びを高めるためには、カン

ファレンスへの参加は有効な手段であることが示唆された。

## VI. おわりに

本研究では当大学における基礎看護学実習に関った看護師のみを対象としており、一般化することには限界がある。今後はさらに臨地実習全体を視野に入れて検討することが課題であるとする。

## 引用文献

- 1) 草野ひとみ、吉川千鶴子、佐久間良子、東辻ケイ子、中嶋恵美子：充実しなかったと学生が判断した実習の影響要因、第30回看護学会論文集（看護教育）、164-166、1999
- 2) 道脇真由美、森本加代子：臨床実習において学生自身の内面に変化を及ぼした場面の分析、第30回看護学会論文集（看護教育）、164-166、1999
- 3) 早川操：デューイの探求教育哲学、初版、223-225、名古屋大学出版会、1994
- 4) 藤岡完治：臨床実習指導ワークブック、第1版、20、医学書院、1996
- 5) 百瀬由美子、小松万喜子、柳沢節子、小林千世、楊箬隆哉、坂口しげ子：臨床看護実習における教員及び臨床指導者の学生指導に関する問題とその対策、信州大学医療技術短期大学部紀要、Vol. 22、13-25、1996
- 6) 服部鏡子、栗田桂子、鳥居芳江、多田賀津子、縄秀志、平河勝美、近田敬子：臨床実習指導における看護婦の意識構造に関する研究、第28回看護学会論文集（看護教育）、94-97、1997
- 7) 小林めぐみ、白石令子、花田妙子：臨床実習における看護学生の存在に関する研究Ⅰ（看護婦と学生の認識の比較）、日本看護研究学会雑誌、20（3）、344、1997
- 8) 坂口けさみ、松岡高史、楊箬隆哉、松岡高史、西村尚志、加藤憲二、山崎章江、小林千世、柳沢節子、関森みゆき、森田孝子、清沢研道：臨床看護学実習における実習指導への関りと看護学生の学習課題に関する臨床実習指導者及び臨床看護スタッフの認識について、信州大学医療技術短期大学部紀要、24、1-13、1998
- 9) 白石令子、小林めぐみ、花田妙子：臨床実習に

- における看護学生の実存に関する研究Ⅱ（看護婦の経験年数による認識の比較）、日本看護研究学会雑誌、20（3）、345、1997
- 10) 岩間みどり、滝沢深雪、山本和子、山本時子、瀬口ミツ子、水田洋子、山田保子：臨地実習指導者の指導に対する認識、第30回日本看護学会論文集（看護教育）、30-31、1999
- 11) 松井英俊、佐藤敦子：看護基礎教育における臨地実習に対する臨床看護婦、看護師の関心、第30回日本看護学会論文集（看護教育）、27-29、1999
- 12) 丹治和子、斎藤チエ子、早坂一子、佐藤幸子、津田裕子、我妻信子、清野睦美、脇屋昇子：看護婦と看護学生の関りの実態調査、第29回看護学会論文集（看護教育）、54-55、1998
- 13) 松井英俊、佐藤敦子、貞広満里枝：職位による役付き職員の臨地実習に対する関心、第30回日本看護学会論文集（看護管理）、168-170、1999
- 14) 上野貴子、北村愛子、磯部ひろ美、上田福久江、浅川美智子：病棟スタッフ全員が関る臨床実習指導体制とその評価、第29回看護学会論文集（看護教育）、51-53、1998
- 15) 小松美穂子：臨床とともに作り上げる臨床実習教育、インターナショナルナーシングレビュー、23（5）、35-38、2000
- 16) 村島さい子：実習生の経験と向き合う臨床実習教育、看護教育、42（2）、94-103、2001
- 17) 高橋方子、竹本由香里、丸山良子：基礎看護実習Ⅰ段階に関した看護職者の実態と意識調査、宮城大学看護学部紀要、5（1）、112-120、2002
- 18) 辰野千寿、高野清純、加藤隆勝、福沢周亮：教育心理学辞典、初版、46、教育出版、1986
- 19) 依田新監：新・教育心理学辞典、初版、77-78、金子書房、1979
- 20) 新村出編：広辞苑、第5版、2522、岩波書店、1998
- 21) Lani Zimmerman, Joan Westfall : The Development and Varidation of A Scale Measuring Effective Clinical Teaching Behavior, Journal of Nursing Education, 27(6), 247-277, 1988
- 22) 石川ふみよ、森千鶴、千葉恭子、奥宮暁子、大西和子、大淵律子、小林伸子：臨床看護実習における教員評価表の妥当性と指導体制の一考察、東京都立医療技術短期大学紀要、4、77-90、1991
- 23) 渡部節子、坂梨薫、目久田千恵子、大山和子、玉井稔子：臨床実習指導に対する評価、日本看護研究学会雑誌、20（3）、208、1997
- 24) 中西睦子：臨床教育論、初版、289-294、ゆりみ出版、1983
- 25) 菊地昭江：看護専門職における自律性と学生指導役割との関連、日本看護科学学会誌、19（3）、47-54、1999
- 26) 早川操：デューイの探求教育哲学、初版、6-12、名古屋大学出版会、1994
- 27) 小野殖子：看護教育の視座、初版、144-150、ゆりみ出版、1987
- 28) 込田愛子、満間信江：看護学生の臨地実習意欲に影響する要因、第31回日本看護学会論文集（看護教育）、42-44、2000
- 29) 新村出編：広辞苑、第5版、2340、岩波書店、1998